



ダイアナ妃にとっての結婚とは、
世俗の幸不幸の基準などはるかに超越した
壮絶で崇高な魂の旅であったのか…

©Quadrillion/CORBIS

今なお輝き続けるプリンセス

Legend of Princess Diana

ダイアナ妃 という伝説

Text / Kaori Nakano

この夏、没後10年を迎えるダイアナ妃。その鮮烈な存在感は、今もなお薄れることはありません。この新連載では、イギリスの文化に通じたエッセイストの中野香織さんがダイアナ妃の思い出を振り返りつつ、その魅力を現在の視点から分析していきます。

vol.1

結婚について

Marriage

文・中野香織

なかの・かおり●エッセイスト・服飾史家。1962年生まれ。東京大学文学部および教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。イギリスのケンブリッジ大学客員研究員などを経て文筆業に。イギリスとその文化にも詳しい。連載記事は日本経済新聞、朝日新聞ほか多数。近著は『着るものがない!』『モードの方程式』(共に新潮社刊)など。訳書も多数手がけている

最高の幸福がもたらした「不幸」

幸福が目に見えるものならば、まさしくこの光景にちがいない、と20歳にもならぬ女子大生は、うっとりテレビに見入っていた。7億5千万人の世界中の視聴者の多くもおそらく、同じ思いであつただろう。

1981年7月29日。海軍司令官の正装もりらしいチャールズ皇太子と、プリンセス・オブ・ウェールズとなつたばかりのダイアナ妃が、赤い絨毯が敷き詰められた階段をのぼっていく。階段を覆いつくさんばかりの8メートル近いヴェールは、ロイヤルウェディング史上、最長。フリルとレースをあしらつたシルクのウェディングドレスには、幸運のシンボルとして、ブルーのリボンと、ダイヤモンドをセッとした18金の馬蹄が縫いこまれていたという。マザー・オブ・パールを1万個ちりばめた9000ポンドのドレスをデザインしたのは、世界最強のデザイナーチームと呼ばれた、デイヴィッド&エリザベス・エムニエルのカップルである。ダイアナ妃の頭にはスペンサー家のティアラが輝く。

世界中が、バルコニーでキスを交わすまばゆいロイヤルカップルを祝福しながら不思議な一体感に包まれた「世紀の華燭の典」だったが、実はセントポール大聖堂での結婚式では、その後の二人を子兆するよう、ささやかな「スリッパ」があつた。ダイアナ妃が、「病める時も健やかなる時も、死が二人を分かつまで、夫を愛し(Love)、慈しみ(Cherish)、夫に従ふ(Obey)…」と誓い、ことばを言うべきところ、オベイ(Obey)を省略してしまつたのである。

緊張のあまり、うっかりと言ひ忘れただけなのかもしれない。しかし、結局、ダイアナ妃の結婚生活にオベイの色薄し。結婚当初からカミラ・パーカー・ボウルズとチャールズのただならぬ関係を感じ取っていたダイアナ妃は、しきりだらけの王室の生活にも疎外感を覚え、摂食障害をエスカレートさせて孤独な苦悩を深めていく。その果てに彼女が選んだ道は、皇太子から独立し、自分自身にオベイして生きること。1992年12月、メイジャー首相は二人の別居を発表。メイ

アを巻き込む泥沼の闘いを経て、1996年8月、15年間の結婚は、正式に解消される。
不幸がもたらした、可能性の開花
興味深いのは、ダイアナ妃の秘めたる可能性が華麗に花開き始めるのが、ほかならぬ別居開始後であることだ。おとなしい王室ファッションを脱皮してセクシーな最新モードを着こなし、慈善活動に邁進して世界を飛び回り、強さと美しさと聖母のような慈愛で人々を魅了して、ダイアナ妃は世界のスーパースターになっていく。

地雷撲滅キャンペーンで訪れたサラエボで、地雷を踏んだ犠牲者がつらい事故の記憶を話したとき、ダイアナ妃はこう言った。「私の場合、1981年7月29日だったわ」。きょんとした全員、それが「成婚の日であつたことを思い出し、大笑いしたという」。

パーフェクトな幸福と見えたものが実は地雷、でもその地雷がもたらした地獄こそが、自分自身を徹底的に見つめ、眠れる可能性を開花させる輝かしい機会ともなつたのだ。そう解釈して成婚写真をあらためて眺めると、ダイアナ妃にとつての結婚とは、世俗の幸不幸の基準などはるかに超越した、壮絶で崇高な魂の旅であつたのか…とも思えてくる。

1997年8月31日の交通事故死から10年、ダイアナ人気はますます過熱している。デイヴィッド&エリザベス・エムニエルのデザイナーチームは、今年6月、ダイアナ妃のウェディングドレスの端切れ付き著書を、1000ポンドという強気の価格で、1000部限定で発売した。このカップルもやはり結婚15年目に破局を迎えていたが、今回の仕事は共同で行つた。二組のカップルの顛末を知れば、ウェディングドレスの白い端切れは、幸せな花嫁をしのぼせる記念品などには到底見えないうら。端切れが何かを象徴するとしたら、それは喜びとともにつらさにも満ち、一人ひとりに異なる魂の試練を強い、最後までその意味がわからず、だからこそ価値のある、複雑で不可解な「結婚」のものであるかもしれない。